

反障害通信

23. 4. 18

130 号

ファシズム論再々考——廣松関係論の援用——

ファシズム論を最初に書いた時に（「反障害通信」118号 2022.4.18の巻頭言「そもそもファシズムとは何だろう？」）、「ファシズム度数」という概念をだそうとしたのですが、それを再論（「反障害通信」123号 2022.9.18巻頭言「ファシズム論再論——いくつかの修正と補足——」）で図式化として撤回しました。今、読書メモで「廣松ノート」で丁度『世界の共同主観的存在構造』を読んでいて、気付いたことがありました。それは、「ファシズム度数」として展開しようとしていたことは、まさに、廣松さんの批判する要素還元論的なところで、しかも要素を足し算的に羅列していったということです。廣松さんは、繰り返し「函数的聯関態」という概念を出して、入れ子型の構造とか、錯分子的構造ということも出していました。その観点からすると、足し算的な要素還元的なことを出していたのは、真逆なことだったのです。改めて、撤回修正する次第です。

ここで、ファシズム論に、もう少し補足説明を加えます。

「ファシズム」そのものと「ファシズム的」の違い

わたしは「ファシズム」という概念だけでなく、「ファシズム的」とか、それとほぼ同じ意味で「ファシズムの胎動」とか「ファシズムの蠢動」とか「ファシズムの芽」という言葉を使ってきました。

当然、「どういう違いがあるのだ？」とか、「共通することは何か？」という反応が出ることです。

ファシズムには他にもいろんなモーメント（暴力的支配、情報操作、ポピュリズム etc.）があり、様々なパターンあるのですが、先に「共通すること」から書くと、①全体主義的なこと（個よりも全体の利害を優先させるイデオロギーを突き出していること（註1））。②差別的なイデオロギーを突き出していること③ナショナリズム、もしくは超ナショナリズム（註2）、というモーメントがあるのだと思っています。

「ファシズム的」からファシズムへの純化・そのものへの展開

これは①差別が差別主義的なこととして純化していること、②イデオロギー的なことでの強力な突き出し、③暴力主義的なことが出てきていることが、ファシズムそのものへの展開の指標になるのだと押さえています。

ちょっと補足説明をしておくと、①はナショナリズム、民族差別や超民族差別としてのレイシズム、民族や人種の序列化につながり、障害差別の極としての優生思想として、差別主義が露骨に顕れてきます。性におけるマイノリティ差別や家父長的差別も出てくる時があります。②は、ナチのアーリア人種による支配としての第三帝国論や日本ファシズムの大東亜共栄圏論、まさに差別主義的な虚構の論理が突き出されます。それは時には、宗教的な粉飾もなされます。国家神道というカルトもまさにそのようなことです。③は、ま

さに情報操作によってそれらの共同幻想に巻き込もうとするのですが、それに抵抗するひとたちヘテロリズムで抑え込むということをもって、ファシズム体制を完成させるということがあります。

なぜファシズム論が必要か？

なぜ、ファシズム論が必要になるかという、過去のファシズムが台頭してくるときの歴史からとらえると、それを防ぐには、「ファシズム的」や「ファシズムの蠢動」、「ファシズムの胎動」、「ファシズムの芽」とかいられているときに、それを徹底的に「ファシズム的」etc なこととして暴き、抑え込み、ファシズムそのものの台頭を許さないということが必要になるのです。そして、ひとつのパターンとして、ポピュリズム的に、改革者を装ってそれらは台頭しようとしてくることを徹底的に暴いて無効にすることが必要になってきます。そのために「論」が必要になるのです。

ナチスは党名に「社会主義」や「労働者」をいれて「国家社会主義労働者党」を名乗っていました。今日、日本の国会に議席を占めている政党で、もっともファシズムと親和性が近いのは、というより「ファシズム的」な存在は維新の会ですが、公務員たたき（特に労働組合たたき）というスケープゴートを作りながらの「行政改革」、そして「地方分権」、「脱原発」を旗印に登場してきました。結局、行政改革はコロナ禍で、大阪の病院や保健所との統廃合で、人口割合において飛び抜けて多くの死者を出したこと、また「地方分権」は結局東京都と大阪の二極体制を作るということで、地方分権と真逆の大阪都構想なるものを突き出したし、最後の脱原発はもうかなぐり捨てました。まさに自分たちが権力を握り、権力を行使したいだけのポピュリズム政治の性格を如実に示しています。

なにがファシズムに対抗する争点になるか

「なにがファシズムに対抗する争点になるか」というと国家主義（——超国家主義）との対決です。超国家主義というのは、「先進国」といわれる国においては、いわゆる侵略的な「帝国主義」といわれてきたことで、国家の拡大路線です。グローバリゼーションが叫ばれる今日でも、簡単に国家の論理に飲み込まれていきます。アメリカの9・11以降の愛国主義的なことにのみこまれたことが、端的にその事を表していましたし、日本でも野党が与党を追及しきれないのは、「国益」とか「国賊」とかいう論理で政府への国家主義批判・追及が、尖鋭化しきれないのです。

経済の世界では新自由主義的グローバリゼーションが世界を覆ったのですが、それに歩調を合わせるネオコンという「自己責任論」を突き出すファシズム的なことと、旧来のナショナリズム的な「アメリカファースト」とか突き出されたファシズム的な動き、という両極的なことがでてきます。これらのことは、まさにローザ・ルクセンブルクが、差別なしには資本主義は継続しえないこととして、「継続的本源的蓄積論」を突き出したことからの深化的とらえ返しが必要になります。そのことから、差別主義的なことをメルクマールとして、そのことを基底に据えたファシズム的展開に入ってくることを押さえて批判していくことが問われているのです。

だから、それに対峙・対抗するには、反差別の総体的・深化的なとらえ返しをしたところで、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』の中で国家ということの共同幻想的な性格を押しえたところを再度きちんと押さえ、これまでの社会変革運動が、とりわけその主流派

であった「マルクス・レーニン主義」ということの流れが、まさに自ら国家主義にとらわれてきた歴史をとらえ返す中で、戦争や紛争の元としてあらわれる元凶としての国家主義の性格に照らしても、この国家主義からの脱却がいまこそ問われているのです。そのことを主軸にして、反差別運動を起こす中に、ファシズムの隆起に対決していかねばなりません。

(註)

1 これは、個の欲望の抑制ではありません。全体主義はエゴイズムと並存しうるので——イデオロギーとしての全体主義と現実としてのエゴイズム。次回「通信」の『ベルリン 1933 壁を背にして』の読書メモで押さえます。

2 「ナショナリズム」の訳語として、「国家、民族、国民」があります。「国民ファースト」という排他的民族主義としての国家主義、超民族主義としての人種差別主義なども押さえておかねばなりません。

(み)

(「反差別原論」への断章) (59) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 130 号」アップ(23/4/18)

◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページに不備・加筆することがあり、昨年かなり大幅な更新をしました。「今後の課題」など関心をもってもらえる方は、読んでもらえると幸いです。<http://www.taica.info/kaikadai2.pdf>

更に協同作業をやろうというひとが、出てこれれば、こんなに嬉しいことはないのですが、……………。

◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」で見れなかったところをチェックして一部修正して再アップしました。今のところ、全部見れるようになっています。

◆「反差別資料室 C」の「文献室」も、新しい本の購入や読書に合わせて、3月の末に二年ぶりにリアップしました。

読書メモ

今回は〔廣松ノート〕の(2)の『世界の共同主観的存在構造』の続きを一回お休みにして、前回予告していた、障害問題で最近出た注目すべき本、「マルクス主義障害者解放運動理論」ともいべき書の読書メモです。もう1冊、その本の中で紹介されていた本も読了、読書メモを書いています。

たわしの読書メモ・ブログ 612

・高見元博『重度精神障害を生きる——精神障害とは何だったのか 僕のケースで考える』批評社 2023

この本は紹介されて本を手にし、「障害者運動」には珍しくマルクスに言及しているので、読みたいと買った本です。最初に第一章で、自分の抱えさせられている障害について言及していて、しかも、自分のケースとして、一般化しない姿勢も参考になり読み進めえました。この著者は「精神障害者」として郵政当局に対する解雇撤回闘争を闘っています。自分の闘いの中で理論化していったことでの格闘が伝わってくる著になっています。この話は第七章の「**障害者解放運動と労働者解放運動**」にもつながっていて、自分の立場からとらえ返すという話として、まとまった論攷を展開しています。

そして、後の章で、マルクスの再評価、レーニン主義批判に踏み込んでいることを興味深く読んでいました。障害問題のみならず、差別の問題を考えていくと、だいたい、筆者やわたしも収束しているところ、レーニン主義の批判、マルクスの読み直しに収束していくのではと、改めて思いを強くしています。わたしの勝手な思い込みかもしれないと思っていたところが、他にも、そのような論攷が出てくるに及んで、反差別というところでの収束・展開傾向としてつかみえました。これは更なる幅広い対話の中で、更にまとまって深化いくのではとの思いも強くしています。

最初に目次をあげておきます。

目 次

はじめに

第一章 精神病とは何なのか、僕のケースで考える

統合失調症の薬と抗うつ剤が効く人／高校生の頃の時代情況——造反の時代／自由への渴望／『気ちがいピエロ』／映画『明日に向かって撃て』の衝撃／無期限全学バリケードストライキ／ベ平連とアンガージュマン(参加)の思想／反戦青年委員会と党派の指導部／僕が勤めた郵便配達と労働組合／バイク振動病とうつ状態とのダブルパンチ／郵政当局の「生産性向上」運動／長期病気休職に追い込まれて／障害者差別の現実／解雇撤回闘争／「全国『精神病』者集団」との出会い／地裁から最高裁に至る裁判闘争／「重度精神障害者」の人権裁判／「能力に応じて働き必要に応じて受けとる」原理の実現に向けて／「見えていないのに知りたくないから見ようとしなさい」

第二章 障害者はなぜ差別されるのか

劣った者とされる障害者／危険な者とされる障害者／虐待と虐殺の対象としての障害者／神出病院事件

第三章 差別の構造・資本主義的社会と障害者差別

日本資本主義の発展と障害者／障害者雇用促進法の矛盾／障害者作業所運動と労働運動の関係

第四章 重層的差別の構造

意志なきものとされている障害者／マルクス主義から障害者を遠ざける差別用語／「格差社会論」の罨——階級社会の真実／日本の貧困の実態

第五章 マルクスの反差別解放闘争

マルクス主義の伝説と労働者解放の思想／日本のプロレタリア革命の前提条件——朝鮮・中国・沖縄・被差別民衆の解放／マルクスのプロレタリア革命実現

論／一〇年後のマルクスのイギリス労働組合観／マルクスにおける階級形成論
／アイルランド独立闘争の高揚／一九七〇年「七・七自己批判」とマルクスの
思想

第六章 マルクス主義的な障害者解放原理

文献としての『左翼エス・エル戦闘史』、あるいはロシア革命正史／勝者の歴史
／ロシア一〇月革命／残忍な事実と希望のもてる事実／一九一七年の世界革命情勢・
ドイツ革命の敗北／ドイツ一九一九年革命敗北の総括／書籍『ベルリン一九一九
赤い水兵』／資本主義社会の解剖学——疎外・物象化がなぜ生じるのか——カール・
マルクス『資本論』の世界観

第七章 障害者解放運動と労働者解放運動

障害者解放運動と労働者解放運動をどう結ぶか／マルクスの「労働」観／共同
体社会の解体／マルクス主義と精神障害者がめざすものとその実現論／左翼に
おけるプロレタリアート概念の混乱と障害者、精神障害者／日本の左翼の混乱
／非正規労働者と「相対的過剰人口」／非正規労働者・障害者からの叛乱／障
害者解放とはなにかという問題に立ち返る

終章 批判的・実践的なマルクス主義を梃子とした障害者解放を

人は変わることができる／資本主義と社会保障／社会保障の破綻点／「木村え
いさんとおしゃべり会」の教訓／個人的な総括／全体的な総括

あとがき

それぞれの立場と担ってきた運動の経緯で関心領域も違い理論的展開も違って来はする
のですが、それはそれとして対話の中で、お互いの新しい理論展開の中に取り込めること
は取り込んでいくことだと思っています。この著には、ほとんどシンクロナイズ的に共鳴
していることが多かったのですが、理論的深化というところでは、ちょっと違和を感じて
いるところから、対話を試みることとなります。ですから、自ずと否定批判的な論調が多
くなるのですが、共鳴的なことがそれで消えているわけではないことをまず書き置きます。

わたしは「言語障害者」と規定される「吃音者」で、しかも長く福祉の対象としては「障
害者」認定されないところで、そもそも「障害とは何か」というところから掘り下げて、「障
害者」の立場に立つというところから、運動的にも理論的に始めざるをえませんでした。
そのような立場から発するとらえ返しでつかんだところでこの著とも対話を試みたいと思
います(註1)。

とりあえず、切り抜きメモという形でコメントしてみます。以下各章ごとに斜体文字で
コメントを挟みます。

第一章 精神病とは何なのか、僕のケースで考える

この章は、個人史的な展開で著者の実践的に積み重ねてきた活動の歴史に、その実践の
中で獲得してきたことの強さを感じました。それに冒頭に書きましたが、自分のケースと
いうことで一般化しないという原則的な姿勢にも共感していました。ただ、理論的なところ
では、一般化していくことで、著者もそのことでは展開しているところです。わたしが
この間「障害の社会モデル」と言うことを研究し、論的に展開しようとしたところで対話

してみます。ちょっと長い引用になります。

「しかし重要なのは「原因がなければ結果は出ない」ということだ。身体的、精神的な過度のストレスが加えられなければ、ひとは精神病発症にはいたらない。精神病発症の原因はその人をとりまく社会環境の側にある。そうであるなら、精神障害者は精神病の発症を自己責任とされたり、罰せられたり労働現場から排除されたりされるべきではない。責任を負い、罰せられるべきは社会の側だ。いまの精神障害者をとりまく社会環境と、病気を自己責任とする思想がいかに転倒しているかは、明らかではないか。／障害の原因を個人に求めること、精神障害者ならば脳内の変化に原因を求めることを「医学モデル」と言い、その場合、治療で病気を治すか、治らないならば精神障害者が差別されている現状に順応することが求められる。障害者、精神障害者が困る原因を社会に求める立場を「社会モデル」という。この立場は、社会的なバリアーを取り除くことを目指す。僕の立場は「社会モデル」を超えて、精神障害の原因を社会に求めると共に、精神障害者が障害者であるがままに労働する権利、あるがままに生きやすい社会を求めている。「一般常識」で考えられるように「健常者」並みに働けるから一般就労で働かせろと言っているのではない。僕の要求は「一般常識」をはるかに超えたところにある。僕は「重度精神障害者の条件でしか働けないが一般就労をさせろ」と要求してきたのだ。障害者が障害者であるがままに、「健常者」と同等の権利を得るべきだと言っている。「八時間労働に実質的に低い労働密度で働かせろ」と要求していたのだ。「働く場をえて労働力を売ることができた者だけが報酬を受け取る」といういまの社会の次元を超えることはもちろんのこと、「能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」過渡期社会を超えて「万人が能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」原理の社会に転換するべきだと言っているのだ。「一般常識」にとらわれていたら到底理解しえない要求であることだろう。それでも良いと思っている。その理由は後に展開する。」79P・・・いくつかのわたしが核心的と押さえてきた論点が出されています。

まず第一に、著者の「社会モデル的展開」がなされていることです。そもそも「社会モデル」への、個人か社会化という二元論に陥っていることへの批判があります。これは「社会」を実体化しているという批判で、そこから障害関係論へと転回していく道筋がとらえられるのです。(註2)

第二に、著者が展開している因果論自体も近代知のパラダイムの中にあり(註3)、近似値的には使える場合があるとしても、厳密に論を立てるときには使えなくなります。たとえば抑圧がなければ現代的に「精神病」の「症状」と言われていることがなくなるのか、という議論もなされていました。確かに、抑圧的なことがなくなれば、様相が変わり、障害規定がなくなるとしても、幻聴とか幻視、自我他我認識がない・違っている、というようなこと自体がみんな消えるのか、という話も出ています。わたしは廣松渉さんの認識論から影響を受けているのですが(註4)、廣松さんが「統合失調症」と言われるひとたちに映る世界がむしろ物象化にとらわれない世界ということができるとはならないか？ という主旨(かなりわたしの解釈が入っています)のことを書いています。べてるの家の試み(註5)の中で、幻聴さんと友だちになるというような実践にもひとつの将来の在り方のようなことを感じています。

第三に、「重度障害者」規定をしているのですが、これはそもそも医学モデルでの等級概

念とつながっていることです。そもそも「重度規定」というのは、資本主義的生産様式で労働現場から排除されるところの規定です。現代政治はそれを数値化——等級化してきました。青い芝の先進的なラジカルなひとたちは、「重度」と言われるひとたちを自分たちの活動の基準にして考えると突き出し、「労働は悪だ」とまで突き出しました(註6)。また、1970年代の後半にあった障害別を超える障害者の全国交流会で、「「重度——軽度」という言い方をするひとがいるけど、差別に重い軽いはない」という提起をしたCP者がいました。また、被害の重さ比べ——どちらが大変かというような比較は止めよう、という提起が反差別運動の中にあっただと思います。わたしは、これは差別の型——モーメントとしての違いとして押さえ、差別形態論を展開しています。「重度」といわれるひとたちはより多く排除型の差別を受け、「軽度」といわれるひとたちは、抑圧型の(努力して障害を克服しなさいというような)差別をより多く受けるということです(註7)。

第四に、「能力に応じて」ということ、「障害者運動」は繰り返し能力主義批判をしてきましたし、「能力を個人がもつものとして考えない」(註8)という突き出しも出ています。これはヘーゲルの内私有化概念批判としての能力の内私有化批判であり(註9)、そもそも労働概念のとらえ返しにも繋がっています。これは、ひとの日常的活動を、労働と家事と個人的営為に分け、労働を第一義的におく資本社会批判であり、労働の廃棄——労働を仕事に転換しよう(註10)、という突き出しが出ています。

第二章 障害者はなぜ差別されるのか

「精神障害者、障害者は、自己の解放のためには1%の人たちが操作して報道した情報の底部から「九九%」にとっての真実に目覚めなければならない。マスメディアや教育で刷り込まれている観念が1%に人たちにとって事実であっても、九九%の人たちにとっては「事実」でさえないという真理に目覚めなければならない。真理は学校教育にもマスメディアにも存在しない。」92P・・・事実にしても「真理」(そもそも「絶対的真理」ということをマルクス派は批判していて、「「真理」とは客観的妥当性の共同主観的形成にすぎない」という廣松さんの提起もあります)ということにおいても、そんなにはっきりしているわけではなく、マスコミの報道していることが、ファシズム社会でもない限り、事実や「真理」をそんなにねじ曲げているわけではないのではないのでしょうか。「1%」——「九九%」という対比は、この社会でカネの面で利益を受けているひとたちと結局不利益になっているひとという対比でしかありません。むしろ、中身的な押さえが必要で、9・11直後に、アメリカが愛国心で染め上げられたとか、日本の戦中の国家総動員体制というような国家主義的なことが出てくることをファシズム批判の観点から批判していくことなのだと思います。もうひとつは、物神化されたものでしかない貨幣の支配が日常生活で貨幣を使うというルーティン化された活動の中で共同主観的意識として形成されていくこととして起きてくることをどうとらえ返していくのか、地産地消の生産と流通を市場経済による支配から脱する協同・協働の試みなどからも(著者も展開しています)、模索していく途もあるのではないかと最近考えています。

「第二章冒頭で触れた蛭子の神話は江戸時代に庶民信仰だった仏教によって排撃された。これは宗派によって、親である神の悪行の因果が子である蛭子に報いたのだらうという話と、障害児を打ち捨てたような神の無慈悲な所業は将来において応報を受けるという話の

二方向からなされた」97P・・・これは著者の文の中で、いくつかあるなんのこともよく分からない文でした。仏教の宗派のことはよく分からないのですが、そもそも因果応報というのは仏教が障害差別的に働いた負の側面だったわけで、排撃されていないのです。それを神話批判につなげるとというのが判らないのです。むしろ神道と仏教の融合のようなことが日本では起きていたのです。そもそも、神(宗教)とは自然の不可解さ・不思議さのまさに物神化(絶対化された物象化)だとわたしは押さえています。神はキリスト教的な全知全能の絶対神から、日本神話やギリシャ神話のような物語を政治的なところで組み込んでいったものとかアミニズムのようなこととして出てきているのですが、日本神話を宗教にしたことによって、論理性も何もないカルトになってしまっているのです。

第三章 差別の構造・資本主義的社会と障害者差別

「障害者は自らを「社会(家族)のお荷物」として差別する価値観に縛られ、社会と教育を支配する資本主義的価値観から障害者自身も自由ではない。さらに障害者家族は資本主義的価値観で障害者を支配する。「働かざる者食うべからず」というイデオロギーは障害者家族や障害者自身も簡単に逸脱できないほど強固なものだ。」108P「レーニンのような社会主義者でさえ、この「働かざる者食うべからず」のスローガンをロシア社会主義連邦ソビエト共和国憲法に書き込んだ。」109P・・・これはそもそもは資本家階級への批判という意味があったのですが、もうひとつ、マルクスの『資本論』の読み違えとしての「労働価値説」が、国家資本主義が労働者を搾取するための生産性向上運動のための労働崇拜として突き出すことから起きていたことで、それが「働けないひと」「劣っているひと」と規定されるひとたちへの抑圧となっていたのではないのでしょうか？

「必要なのは労働運動の側からの連帯行動であり、僕たち障害者のすべきことは、障害者運動をプロレタリア革命運動に利用しようとするあらゆる傾向と闘い、労働運動の側からの連帯行動を創造するために闘うことだ。決してその逆、すなわち障害者運動をプロレタリア革命運動のために利用することがあってはならない(註11)。／障害者運動が本質的にコモンを作り、それが Kommunism に発展するべき実質をもつということは確かなのだが、そのことをもって障害者運動を Kommunism 実現の目的のために利用していいということにはならない(註12)。むしろその自然成長性に任せるべきなのだ(註13)。カール・マルクスが労働者階級の運動の中に期待した自然成長性だ。僕たちプロレタリア革命運動に属する障害者は障害者運動の自然成長性が歪められないように、そして労働運動の側からの連帯行動を創造するために闘うべきだと思う。」117P・・・政治利用主義批判というネガティブな運動だけでなく、「障害者」の存在と運動とその運動の中での理論・理念自体の突き出しが、労働ということ自体の問いかけになり、労働運動のパイロット(水先案内人)になっていくのではないのでしょうか？ マルクスの自然成長性の提起を引き継いだのはローザ・ルクセンブルクで、ローザとレーニンの論争のとらえ返しが必要になってきます。

「わざわざこんなことを言うのは、僕の属した旧来のボリシェヴィキ左翼が行ってきたことは、プロレタリア革命の目的のために障害者運動を含むあらゆる社会運動を利用することだったからだ。それが「マルクス・レーニン主義」左翼の所業だった。そしていまでは僕はそれがカール・マルクスの言説にはまったく反したことだという自覚に立っている。」117-8P・・・レーニンの差別=階級支配の道具論からとらえ返し批判としていくこと。

「これらの運動に参加してもらうことが、障害者運動とプロレタリア革命運動の本当の意味での関係性を理解してもらう道だと思う。僕自身、ボリシェヴィキ左翼としての過去を総括して真性マルクス主義者として立つことによって、あらたな創造の道へ決意を込め踏み出そうと思っている。」 118P・・・「真性」という概念はヘーゲル的な絶対精神や絶対的真理を批判したマルクスからは出てこないのではないのでしょうか？

第四章 重層的差別の構造

「僕は、自分は差別なんかしていないと思っているマルクス・レーニン主義者ほど根深い差別主義者だということを多く経験してきた。ほとんどのマルクス・レーニン主義者は自分が人よりも優れていると思っているから、それだけでも十分に差別者の素質がある。マルクス・レーニン主義者はマルクスやレーニンの差別用語を無批判に我が物としてきた。・・・」 124P・・・差別と言うことがそれなりに認識されてきて、差別語の問題もそれなりにとらえ返しがされているのに、「知的障害者」「精神障害者」に対する差別語だけは使用され続けていることが、強制収用や虐待などの温床になっているのではないかと考えたりしています。差別語の問題での議論や取り組みをしていく必要性を感じていません。

「共産主義組織論の根幹である「指導」「被指導」関係というレーニン主義の基礎概念からして差別的要素を含んでいる。僕は「共感」ということを人との関係形成の基本概念にしている。これは対等な人間関係の基本だと思っている。」 125P

「いま僕は「マルクス・レーニン主義」を正面から否定している。それがスターリンによって編纂・改竄された内容だからだ。だからロシア革命も否定していると思われがちだが、それは違う。ロシア一〇月革命は「プロレタリアート独裁」ではなくて「労農独裁」で行われたという事実を主張しているだけだ。一九一八年までの労農独裁である労農評議会＝労農ソビエトは正しい道だったと思う。その後に行われたレーニンによるプロレタリアート独裁が間違いなのだ。」 125-6P・・・「プロレタリア独裁」を否定するなら、「プロレタリアと被差別民衆の革命」となるのでは？

「いまの日本国家は「エックスキースコア」というコンピュータ装置でSNSをはじめ電子ネットワークを幅広く常時監視している。(X K e y s c o r e(エックスキースコア)は、世界中のインターネット上のデータを検索・分析するために米国家安全保障局(NSA)が使用するコンピュータ・システムである。その存在は、二〇一三年七月に元NSAの諜報員エドワード・スノーデンによって暴露された。あるNSA下級分析官は「電子メールであれ、電話での会話であれ、閲覧履歴であれ、マイクロソフト・ワードであれ、望むものは全て傍受することができる」と語った。)」 129-30P

「日本の貧困の実態」——「日本はいわゆる「先進国」のなかではアメリカ合衆国に次いで貧困率が高い」 134P

「この生活苦の状況はすでに社会が壊れていることを意味しないだろうか。」 135P

第五章 マルクスの反差別解放闘争

「カール・マルクスは、「アイルランドの独立(連邦制も含む)は、イングランドのプロレタリア革命の前提条件だ」(一八七〇・一・一「IWA(インターナショナル)総評議会」の特別会議にて)と語っていた。」 138P・・・マルクスの『資本主義生産に先行する諸形態』や

ザスーリッチへの手紙におけるアジア的生産様式論、古代社会ノートとこのアイルランド問題が後期マルクスの転回と言われること。

「イギリスの労働者階級は、それがアイルランドから免れえないうちは、決してなにごとも達成しえないだろう。槓杆(梃子のこと)はアイルランドに据えられなければならない。そうすれば、アイルランド問題は社会運動一般にとって非常に重要なのだ。」147P・・・梃子としてのアイルランド問題

(一八七〇・四・九「マルクスからジークフリート・マイヤーおよびアウグスト・フォークト(在ニューヨークへ)(ロンドン)」「ロンドンの中央評議会の特種な任務は、アイルランドの民族的解放がイングランド労働者階級にとって、抽象的正義とか人道主義的感情の問題ではなくて、彼等自身の社会的解放の第一条件であるという意識を、イングランドの労働者階級の心のうちに呼びさますことだ。」149P・・・日本の反差別運動でも「〇〇の解放なしに労働者階級の解放はない」と語られていたこと。

「一八六九年まで、マルクスは被差別・被抑圧人民がプロレタリア革命に合流すべきだと考えていた。しかし、「深い研究」(これは全集一六巻に収められている)を経て考えを一八〇度ひっくり返した。労働者階級は差別・抑圧と闘い、自らの差別を乗り越えて、それらの解放を勝ちとることで被差別・被抑圧人民の信頼を得ることが、プロレタリアート解放の「前提条件」だとマルクスは考えるに至った。」150P・・・「前提条件」とのち(190P)の規定(これが「合流」の内容)の矛盾

「日本共産党のように被差別人民が自らの「誤った考え」を正して、差別する側の人間の「科学的」思想に合流させるという考え方が、まったく転倒したものだということは明らかだ。」151P

「プロレタリアートが革命的な階級として資本家階級と対決するためには、華青闘の糾弾を受けて認識することができた自己の民族排外主義、差別＝分断意識を問いなおして理論構築する必要がある」、ということだろう(ここでは被差別・被抑圧人民は「プロレタリアート外の存在」とされている。僕はこの規定には反対である。この問題については後述する)。」156P・・・「華青闘の糾弾(告発)」と「七・七自己批判」の内容なのですが、「後述」については190Pで著者が展開しています。わたしはむしろ、反差別ということの中に、労働者への生産手段の所有からの排除という差別と労働力という物象化されたところでの価値を巡る差別分断を描くことだと思います。勿論、労働を巡る差別が資本主義社会の土台的という意味で基底的差別として、プロレタリア革命という突き出しが必要になるのですが、先導性や包含性という問題ではないとは言えます。

「しかし、革共同による「七・七自己批判」思想の理論化の過程でマルクス主義の原理を使うのではなくて、魯迅の文学的表現である「血債の思想」を借り物にしてきたことから、中身が「道徳」「倫理」の問題と理解された傾向が強かった。しかも、後には革共同内の官僚的独裁の道具にされてしまい、労働者党員の呪詛の対象となっていった。」156P・・・血債の思想の倫理主義批判は他党派からもなされていたのですが、それに代わる理論化がうまくいった例はなかったのではととらえています。例えば、わたしがかつて属した解放派は「立場の転換論」を出していました。これも、どうしたら転換し得るのかという道筋をだしていませんでした。わたしはこれは、自らの抱える被差別から、差別を総体的基

底的にとらえ返したところでの反差別運動としての連帯というようになるのだと、押さえ直しています。この話は 190P に続きます。

「結局、どの左翼諸党派も七・七華青闘の告発に対して正しくマルクス主義的に自己批判することはできなかった。「華僑青年闘争委員会は毛沢東主義だから」という奇妙な理屈さえ言われていた。毛沢東思想の中からも正しい立場を汲み取るとは提起されていなかった。それは一八六九年十一月以前の古いマルクス主義の立場であっても、まず最初に被差別・被抑圧人民の信頼を得るためにプロレタリアートは具体的な連帯にとり組むべきという転換をした後のマルクスの思想ではまったくなかった。「七・七華青闘の糾弾」で突き付けられたものに具体的に応える、入管闘争とか生活防衛闘争を支える思想的内容は全く欠如していた。／その結果、新左翼諸党派内でもこうした問題は「諸戦線」という名の専門部だけが担う問題に矮小化され、「労働者階級本体」にとっては道徳や倫理、「踏まえるべき立場」の問題に矮小化された。後には「血債の思想」は文学的表現でありマルクス主義ではないからと切り捨てる部分も生まれた。これはマルクス主義への無知であり、無知であるが故に自らの頭脳で考えることもなく裏切りに連なるものだ。／われわれはもう一度、華僑青年闘争委員会の糾弾の原点に立ち戻り、マルクス主義思想に立脚した「七・七自己批判思想」を確立しなければならないと思う。」 156-7P・・・著者の結語、実践的な方針を提起してくれています。ただ、「血債の思想」に代わることを明確に出し得ていません。「信頼を得るために」という言い方自体が、プロレタリアートの先導性やプロレタリアートの階級闘争への合流論としての「分断を乗り越えるために」という発想になっています。それはレーニンも陥っていた「階級支配の道具(手段)論」の域を超えていないのであって、わたしはむしろ、反差別運動の総体的・基底的にとらえ返しによる展開として、実践からの連帯と自らの差別性の克服、と押さえることだと思っています。

第六章 マルクス主義的な障害者解放原理

「実際にはレーニン＝ボリシェヴィキは、少数者である工場労働者による多数者である農民への「無慈悲な」独裁体制を敷いた。当時のロシアでは人口の八割は農民だったのに、少数者である工場労働者だけによる独裁が何を意味したかは想像に難くない。それは実質的には労働者独裁でさえなくてボリシェヴィキ党による独裁であったし、党組織論の「中央集権的民主集中制」によって一握りの党指導部による独裁になっていった。163P・・・実質「革命的インテリゲンチヤ」による独裁に陥っていった。「中央集権的民主集中制」「中央集権的民主集中制」や「分派の禁止」のとらえ返しの必要。

「いま必要なことはロシアの一九〇五年に相当する日本の一九六七年からの激動を、国際的には一九六八年のパリの五月革命からの世界革命を彷彿とさせた激動の時代をどう現在に引き継ぎ発展させるのかということではなかろうか。そのために現在の僕が必要だと思うのはマルクス主義のルネッサンスであり、即物主義的唯物論の呪縛からマルクス主義を救出することだ。スターリンが綱領化した「マルクス・レーニン主義」の泥沼からマルクスを解放し、マルクス主義を再構築して学び、発展させることだと思う。」 170-1P・・・著者のマルクス思想の再生と深化論。六〇年後半からの闘争の延長線上にマルクスの思想の再生と深化がありえるのでしょうか？

「また、晩年のマルクスは物象化がもたらす「物質代謝」の攪乱との闘い、すなわちエコ

ロジーの観点に達していた。人間の物質的な生産の過程は、自然に対して働きかけて、自然物が人間の体内での代謝活動のように変化する過程を助けることだが、近代文明はこの自然の生命力の発現＝物質代謝を破壊している。農業における化学肥料の過度の使用が土の生命力を奪ってしまったことがその典型だ。また工業都市は自然そのものを破壊した。マルクスはこれを糾弾し、自然の代謝力を取り戻すことを考えていた。これは最近見つかった晩年のマルクスの膨大なノートに書かれている。これは最近の発見として重視されなければならない。」179P・・・このところもよく分からなかったところ、マルクスの「物象化」ということならば、その言葉の使い方がマルクスとは違っています(註14)。ここでは産業化なり、工業化なり、文明化とかという意味にしかっていないのでは？ 深読みして、「商品や貨幣という物象によって支配されていくこと」ともとれなくはないのですが。従来使われている用語をカスタマイズして使うときには、ことばの定義を出しておかないと、混乱していくのではないのでしょうか？

「マルクスは現実の労働者が、いかにして革命の必要性に目覚め、具体的、実践的な活動に移り得るのかを解明しようとした。それはまさに資本制生産過程そのものを通して労働者が達しうる「この現在の苦痛は変えなければならないし変えることができる」という認識の獲得であり、意識の変化だ。マルクスはこの意識の変化の中にこそ革命の可能性があると考えていた。だから、「疎外」や「物象化」という資本主義の矛盾を労働者に「自覚させる」ために啓蒙するという哲学的・政治的営みが必要なのではない。そうではなくて、まさに労働者が日々実感している物象化とその結果としての疎外感に働きかけて、現代社会の苦痛に満ちた現実を変えることができるし、変えなければならないということを明らかにすることが必要なのだ。『資本論』はまさにそのために著されたのだ。」179-80P・・・このところもよく分からなかったところ。啓蒙主義批判はわたしにもありますが、そもそも『資本論』の読み方を、物象化という概念なしに読んだら、「障害者」の抑圧の理論になっていく労働価値説に陥っていきます。そのことは著者も182P「人間の本質は労働である」という言説への批判として書いています。「物象化とその結果としての疎外感」というところ、前述したように「物象化」の言葉の使い方が違うのですが、そもそも初期マルクスの疎外論から物象化論への転換の議論をたぶん著者は知っていて、あえて両概念を併記しているとわたしは感じているのですが、どうとらえているのでしょうか？

第七章 障害者解放運動と労働者解放運動

「長い間、労働運動の世界、俗流マルクス主義者の間では「人間の本質は労働である」と言われてきた。」182P・・・前の(180P)のコメント参照

「俗流マルクス主義者が主張してきたような、「労働にもとづく分配」が将来社会だという考え方はマルクスの本来の主張ではない。「労働にもとづく分配」が行われるならば労働できない障害者は何も受け取れない。たとえ生産力が低い段階の将来社会でも分配は共同体の論理で行われるべきだ。旧ソ連の「働かざる者食うべからず」という憲法は、マルクス主義の理念とは全く関係がない。」188P・・・もう少しきちんと展開しないと、「共同体の論理」が倫理主義に陥ります。(註15)

「マルクスは、一九世紀のイングランドにおける革命の展望において、「アイルランドの解放なくしてイングランド人プロレタリアートの解放はない」と、まずプロレタリアートが

強い分断を乗り越えて団結するには被差別・被抑圧人民の解放を第一の目標として闘うべきだと主張していた。「疎外された」労働者自身が、他人を疎外し差別しているかぎり、「疎外されている」自らの状況から解放されることはない。」189P・・・テーゼの再提起

「彼(マルクス)の思想の限界は西欧諸国中心主義的であったことだ。」190P・・・確かにそうだが、古代社会ノートやアジア的生産様式論の発見、アイルランド問題からの転回の様相はあったと言えらるでしょう。

「これに対してイタリアの共産主義者アントニオ・グラムシ(一八九一年～一九三七年。イタリアのマルクス主義思想家、イタリア共産党創始者の一人)は、「プロレタリアート」に替えて「サバルタン」概念を使ったのには、当時、獄中であって検閲を通すために、共産主義の用語である「プロレタリアート」を使えなかったという事情もあった。同時に資本家対労働者の対立とは違う階級間の対立がイタリア南部や植民地諸国に見られたことの表現だった。グラムシは、それら「周辺」からこそ帝国主義世界体制を突き崩す闘いが始まると考えていた。／この「サバルタン」概念を、非西欧的諸国の無産者を社会変革の主人公と考える人びとが、革命主体を指す言葉として使用した。植民地諸国の無産者階級解放のために使われた概念だった。日本ではガヤトリ・C・スビヴァク(一九四二年生まれ。インドのベンガル出身。アメリカ合衆国コロンビア大学教員、『サバルタンは語ることが出来るか』などの著者)が知られている。」190P・・・これはローザ・ルクセンブルクの「継続的本源的蓄積論」、すなわち「資本主義の始まりのときの本源的蓄積ということは、今日的には「資本主義は差別なしには存続しえない」こととして、資本主義社会に必要な条件的にくみこまれている」ということで、レーニンの差別=階級支配の道具論批判の内容をもって、その後の従属理論や世界システム論、ネグリ／ハートの『<帝国>』でのグローバリゼーション論などにつながり展開されています。とりわけ、ネグリのマルチチュード概念は、サバルタン概念とリンクしていきます。これは「闘う被差別民衆」ということでも表されることではないかとも思います。

「僕は、今日では、この「サバルタン」概念も、本来の「無産者階級」(子ども以外に財産をもたない無産者)という意味で、プロレタリアート概念に含めるべきだと思う。」191P・・・逆ではないでしょうか。「被差別民衆」ということにプロレタリアートを含めることです。「今日では「ルンペン・プロレタリアート」というのは、固定化された一階級をさす概念では全くない。実際にマルクスは後年この言葉を「相対的過剰人口」の一部をなす人びととしてしか使わなくなった。それでも、マルクスが一つの階層を指す言葉として使ったのが妥当だったのかどうかは、当時の事情を詳しく知らないとは分からないのだろう。／当時の障害者たちで「物乞い」としてしか生きられない人々は多くいただろうし、生きていくのに必死になっている人々のことを「ルンペン(乞食)」と差別的に蔑む権利は、マルクスを含めて誰にもない。こんな言葉は、歴史的事実として以外には使われるべきではない。」193P・・・この後にも著者が展開しているのですが、そもそも今日の非正規雇用の拡大で位置づけが変わって、外国人労働者とともに、むしろ社会変革主体としてとらえられてきています。

「多くの労働運動では、非正規労働者や、障害者、被差別、被抑圧人民などは、一段下の

従属的存在としてしか位置づけられて来なかった。今日では、資本家階級打倒のエネルギーを一番多く蓄積しているのは、まさに伝統的左翼諸党派が「相対的過剰人口」とか「ロンペン・プロレタリアート」と呼んで蔑んできたこれらの「周辺」の「従属的社会集団」の人びとなのだ。いや、彼ら彼女ら「周辺」視する視線そのものが、今日では時代遅れだと言うべきだろう。女性労働者では非正規雇用が過半数を占めていることから明らかなように、今や彼女らの方が労働運動の主流派であるのだから。」195P・・・元々本工主義批判としてなされてきたこと、周辺——中心(主流)の反転のようなことが少なくとも運動の側では起きてくるのでは？

「精神障害者であり、マルクス主義者である僕は、人間解放のための実践的・批判的思想に生きる意味を見出している。この世界の誰か一人でも抑圧され差別されているならば、それは僕の不幸だと感じる感性の社会に生きている。」197P・・・著者の自分の立場の突き出し。マルクス主義障害者解放運動。

「だから抑圧されている側の障害者が自己解放しようとしたら、政治的・経済的活動と連帯して、この支配・抑圧の「社会構造」を廃止しないとイケない。それが障害者にとって労働者解放運動、すなわち労働組合運動や政治運動との連帯と共闘が必要な理由だ。そのためにはまず第一に労働者の側から差別の壁を取り除くことが必要になる。被差別・被抑圧人民からは、自らが差別の壁を壊すと共に、労働者たちが彼らが作っている差別の壁を壊すことを助けることが必要になる。その統一こそがコミュニズムだ。」198P・・・労働運動と障害者解放運動の結合・統一、「まず第一に労働者の側から」？単なる意識変革運動——啓蒙ではないのだから、「社会モデル」的な意味での障害を取り除く運動の主体性は「障害者」側にあるのではないのでしょうか？

「障害者解放運動とコミュニズムはこのように結びつく。本来のコミュニズムとは人間解放の実践的・批判的運動のことだ。コミュニズムは狭い意味での国家権力の奪取を目指す運動ではない。哲学的立場を突き抜けて、哲学を超えたところにある人間解放の実践的・批判的運動なのだ。」198P・・・著者は「解放」ということばを使っています。勿論「差別からの解放」の意味なのでしょうが、「解放」という概念には疎外からの解放として「本来の」(註16)という意味も持っています。そのことはマルクスがなぜ疎外論から物象化論へ転回したのかということのとらえ返しの問題にも繋がっていきます。ヘーゲルの絶対精神の外化・疎外概念批判がマルクスの中にあり、疎外ということを経験的表現として使いつづけたとしても、論理的哲学的な意味ももっているところでは使わなくなったのではないのでしょうか？レーニンも極めて実践的な政治家でしたが、論争のためにヘーゲル学習をしています。晩年のエンゲルスがマルクス理論の解説者の役を担いつつも、そこから踏み外して弁証法の法則化というところに陥ってヘーゲル回帰していると批判されていることと相俟って、レーニンもヘーゲル回帰しているのです。実践においても、思想においても哲学もすえないと、古い観念にとらわれていく、まさに物象化された世界から抜け出せないのです。なぜ、わたしが強い影響を受けている廣松渉さんがアカデミックな世界に身を投じ、物象化批判の論攻を展開していったのかということも、わたしは運動的なところからとらえ返そうとしています。

終章 批判的・実践的なマルクス主義を梃子とした障害者解放を

「コロナ禍で明らかになったことの中で、障害者との関係で注目すべきことがある。小さな個人の周りの幸福追求こそ、人間本来の在り方であり、コミュニズムの本旨なのだということだ。コロナ禍のなかで経済成長を追及することで「物」に支配されるのを止めて個人の幸福を追求する生活が垣間見えた。」 200P・・・エコロジーとコミュニズム

「今の民衆の意識としては、経済成長一辺倒が人類の生存を脅かしているという認識がコミュニズムに直接的に向かうのではなくて、現状のままではまずいという中間的表現になったのが、「SDGs」ブームだと思う。将来の社会主義像が経済成長追求型計画経済のものであったことが、若者たちの危機感が社会主義に向かわなかった理由だろう。若者の中のマルクス主義者の斎藤幸平の脱成長論への支持の広がり、この動きをコミュニズムにつなげるものとしては興味深い。／岸本聡子は、水道民営化に反対し、「ミュニシバリズム」を提唱してきた人だ。ミュニシバリズムは都市社会主義とも訳され、地域の主権を大切にす新しい社会運動だ。水道民営化などの共有財切り売りに反対してコモン(社会的共有財)を大切にする考え方だ。こういうミュニシバリストが首都の区長に当選するというのは、画期的な出来事ではなかろうか。」 201P・・・コミュニズム志向の運動の総括がなされないままに、社会変革運動が行き場を失い、現実的矛盾に対処する活動として様々な運動が起きてきています。中には、資本主義社会内でも解決できる問題があるにしても、多くは資本主義社会を止揚することなしには解決できないし、差別の構造そのものは、資本主義社会は差別なしには延命できない構造になっているので、著者がマルクス・レーニン主義批判に着手しているように、コミュニズム志向の運動の総括が今問われているのではないのでしょうか？

「これらは(福祉からのこぼれ落としと「精神障害者」の隔離は新たな、資本主義の墓堀人を膨大に生み出す破綻であった。障害者施設や精神科病院を廃止したいという願いは、一九七〇年代から障害者解放運動の潮流を生み出した。そればかりか、この障害者解放運動は、労働運動の歪みを糾す新たなターニングポイントでさえあった。」 206P・・・「歪み」だけでなく、そもそも「障害者運動」の中から起きてくる、労働・労働力(の価値)という物象化の批判というとらえ返しが、労働運動の分断を超える新しい労働運動を生み出すターニングポイントになること。

「一九八七年の中曽根政権による国鉄分割・民営化は、「総評」労働運動懐胎による労働運動の大後退をもたらした。しかし、今日ナショナルセンター「連合」は資本家階級の手代である正体を、誰にもわかるように晒し出しており、「連合」内部と外部から、地域ユニオン運動などが、その支配体制を突き崩さんと闘っている。そしてその先端部は、障害者解放運動と結び付いている。」 206P

(註)

1 障害とは何かというところのとらえ返しのなかで、わたしは障害問題のパラダイム転換といわれるところから出てきた(実は転換をなしかれていないのですが)「障害の社会モデル」について考えてきました。すでに、社会モデルというのは過渡の理論として、障害関係論的な突き出しをしようとしています

2 わたしは自分が出した本『反障害原論——障害問題のパラダイム転換のために——』

世界書院 2010 の中で、一応関係論まで展開しているのですが、そもそも本のタイトル自体が「障害の社会モデル」的などころから転換しえていません。これは後日「障害関係論原論」として突き出そうと思っています。

3 因果論批判は「通信」116号巻頭言「そもそも因果論とは何だろう？——因果論という非論理性——」

https://771033e8-ab2b-4e5b-9092-62a66fd59591.filesusr.com/ugd/6a934e_b051009c18d44c518f8a107364c4bb4a.pdf

4 廣松さんも十全に差別の問題を対象化しえていたとは言えないのですが、これについては(情況出版)2010.7「廣松渉物象化論の反障害論-『反障害原論』の隠されたサブタイトル」hiromatubusho.pdf (taica.info) 参照

5 社会変革志向の「障害者運動」をやっているひとたちから批判も出ているし、差別ということへの批判やその取り組みがないという点で、気持ちの持ち方を変える運動になっているのではないかと、という批判をわたしももっています。

6 青い芝の提起で「介助を受けるとき腰を上げるのも労働だ」という突き出しもしていました。これは「労働」でなくて「仕事」とわたしは押さえ直しています。これについては、(註10)でコメント。

7 三村洋明『反障害原論——障害問題のパラダイム転換のために——』世界書院 2010 「第八章 差別形態論」参照

8 竹内章郎『いのちの平等論—現代の優生思想に抗して』岩波書店 2005 参照

9 これは資本主義社会を成り立たせている特許制度を考えると分かりやすいのです。先人の膨大なる蓄積の上に個の発見や発明があり、過去の蓄積をどこかで切り捨てることによって特許制度が成り立っているのです。そもそも言語がなかったら、知の蓄積など不可能であり、言語はまさに著者の言葉をかりれば「コモン」なのです。

10 労働は生物学的には「他者のためにする活動」という定義(今西錦司)があります。労働には搾取という概念がつきまといまいます。仕事を「みんなのためにする活動」としての、「労働から仕事へ」という提起を今村仁司『仕事』弘文堂 1988 がなしています。

11 そもそもはプロレタリア運動に障害者運動を含めるというテーゼからきていること。わたしは、反差別運動にプロレタリア運動を含めるとすることだと思っています。

12 プロレタリア運動主導論になっていて、わたしは反差別運動の中のプロレタリア運動としてとらえ返すことだと思っています。

13 「任せる」ということは拜跪にもなります。ここは「依拠する」と書くところではないでしょうか？

14 マルクスの「物象化」概念は、「人と人との関係を物と物との関係としてみる」とか「社会的関係を自然的関係としてみる」というように押さえられています。

15 (註10)参照

16 「本来」なることを設定すること自体が、「本来」から外れるととらえられるひとへの差別的抑圧的な意味をもってしまっています。これは疎外論批判にもつながっているのですが、ヘーゲルへの回帰に陥ったエンゲルスの二の舞にもなっています。

・ **スタインベルグ／蒼野和人・久坂翠訳『左翼エス・エル戦闘史』鹿砦社 1970**

この本は前のブログ 612 の本で紹介されていた本です。

ロシア革命史はボルシェヴィキか後にボルシェヴィキに合流したトロツキーの『ロシア革命史』くらいしか広まっていず、別の視角からだされた本は少ないようです。これは、ボルシェヴィキと一緒に 10 月革命を担った左翼エス・エルの、革命政府の司法委員になったスタインベルグの著書。左翼エス・エルを牽引したマリア・スピリドノワを軸とした群像的な著になっています。

「人民の意志」やそれに連なる「社会革命党」(SR) は、テロリズムを行使していたので、陰謀術策の組織としてとらえられがちなのですが、レーニンのボルシェヴィキがむしろ陰謀術策的、現実的、他者に犠牲を強いることをやっていて、レーニンの立てた原則は、空論的に投げ棄てられることがあったようです(「民族自決権」や国際主義の空論的な性格を表した、徴発やブレストーリトフスク条約でのウクライナなどをドイツへの引き渡したことなど)。社会革命党の方が、より原則的・理想主義的な組織だったようです。ロシアにおけるテロリズムは、専制政治の暴力支配に対して、暴虐・虐殺を許さないとして防衛的な意味を込めて行使されていた様子がこの本の中で明らかになっています。暴虐の嵐が吹き荒れているときに、民衆の命と生活を守るためのテロリズムという様相です。それは、個人的感情には流されないとしたところでの、組織決定した上でのテロリズムで、革命後の虐待者への民衆の復讐を制御するという動きさえあったようなのです。もう一方で、テロにたいする報復としての虐殺や暴虐が起きてくることに対する(それはナチスドイツに対するレジスタンス活動に対する報復とかチェカ(秘密警察)の、SR 党員のレーニンに対するテロにたいする報復虐殺とかにも顕れています)ジレンマのような思いも抱えていたことが記されています。それには、どちらにしても起きることとして、なさざるを得ないとして、立てたテロリズムでもあったのですが。

ボルシェヴィキと左翼エス・エルは、レーニン・ボルシェヴィキがブレストーリトフスク条約を「革命の息継ぎ」としてウクライナ等の「引き渡し」ともいう内容をもって結んだことで別れました。その後、党の独裁的な性格を如実に表していく中で、エス・エルの党員の「個人の判断」(?)でのレーニンへのテロ、チェカ内部にいたエス・エルメンバーの処刑、クロンシュタットの叛乱とその弾圧とかで、エス・エルはまさに弾圧の対処になっていきます。

レーニンのマリア・スピリドノワ評は「誠実」ということですが、それとレーニンの強力なリーダーシップによる革命の推進と防衛というところで、手段を選ばないというような運動スタイル、その対極さが浮かび上がってきます。

一般にロシア革命が歪曲されたのはドイツ革命などの敗北に規定されたのだという意見が一般的にあるのですが、「たら・れば」のはなしをしても仕方がないのですが、わたしはむしろ、レーニンのロシア革命の防衛を第一義的においた共産主義運動の原則の踏み外しが、ドイツ革命の敗北につながったという性格もあるのではとったりしています。

この本の著者は、アナキストとSRを区別しています。そのあたり、共産主義—社会主義に照らして原理・原則主義的な立場からボルシェヴィキの踏み外しを批判しているの

ですが、マルクス理論を挟んだ理論的な対話・批判というようなことが殆ど書かれていません。そもそもレーニンがマルクス理論を幾重にも踏み外したのですが、革命のためには手段を厭わないとしたレーニンの運動・思想を、更に極端化したのがスターリンで、それが何をもたらしたのか、今日的な国際共産主義運動の崩壊的情况に照らすと、レーニン主義はきちんと批判されることだとわたしは思っています。

切り抜きメモを簡単に残します。

「彼女（スピリドノワ）が望んだ綱領は、都市労働者と農民が協力しうるものであった。社会革命党（「エス・エル」のルビ）の綱領のなかに、彼女は自分が望んだものを見出した。スピリドノワは、労働者の利害と、農民の利害との間にどんな矛盾もみることができなかった。『土地と自由』は彼らの合い言葉であった。労働者は、土地の社会化という社会革命党（「エス・エル」のルビ）の綱領の真価を認めることができた。なぜならそれぞれの都市労働者は、多くの靱帯で、出身地の村に結びつけられていたからである。社会革命党（「エス・エル」のルビ）は、その隊列の中に第三階級——知識人にも場を与えていた。マリア・スピリドノワは、精神の拠りどころをこの社会革命党（「エス・エル」のルビ）の社会三位一体（「ソーシャル・トリニティ」のルビ）説にただちに見出した。」 19P・・・「農民」は階層で、一緒くたに論じられないとか、インテリゲンチヤのプチブル的性格とかを押さえる必要があるにしても、プチブル・インテリゲンチヤの立場としては、プロ独論よりはすっきりしていたのでは？

「マルクス主義哲学においてもっとも重要なことは、階級であり、大衆運動であった。社会革命党（「エス・エル」のルビ）が大いに強調する個々人の人格のための場所は、そこにはなかったのだ。／社会革命党（「エス・エル」のルビ）のなかにマリア・スピリドノワは、道徳的破産と結びついた冷たい科学的分析の精神を超えた何ものかを見出していた。社会革命党（「エス・エル」のルビ）においては社会主義とは、生身で耐え、信じ、闘う人間に近いものだった。」 20P・・・逆にいえば、倫理主義・正義感でのプチブル的・自己犠牲のナルシズムになっていたのではないのでしょうか？ 抵抗運動はやれても、持続的な革命闘争を闘う組織になっていなかったのではないのでしょうか？ ただ、マルクスは「全ての歴史は階級闘争の歴史である」と書いていたのですが、階級概念がいまいになっていて、生産手段の私的所有を巡る占有と排除ということとして限定してとらえれば、他の差別を必ずしも包含しなくなります。今日的には、サヴァルタンなりマルチチュード概念をとりこんだところで、プロレタリア独裁概念をとらえ返すこと。むしろ反差別というところに、階級概念も含めていくこと。

（カホースカヤ）「深刻な内輪もめをひき起こしそうな政治的諸問題は、けっして討論されなかった。私たちの社会的背景の違いもまた、何ら重要ではなかった。社会主義者としての共通のイデオロギーが、コミューンの全構成員を同じ立場に置いていた。貴族的習慣のなごりはすっかり忘れ去られた。共有財産の完全な社会化という原則に従って生活していたので、私たちは互いに衝突する機会がなかった。知的財産もまた、完全に社会化されていた。本ばかりでなく、私たちが自由の身でいた時には極めて不平等に分配されていた知識や教養が、今や共有の財産となった。人より多くの知識を習得できるという幸運に恵まれてきた者たちは、こんどは教えるということに大部分の時間をさいた。通常の社会的生

活においては人間を互いに隔てているすべての社会的障害を完全に絶滅させたことは、特に満足すべき、いわば友情の基盤とでもいったものを準備した。私たちの多くの者が、本の価値だけでなく、何にもまして、ひとりの人間が他人に対して何を与えることができるか、ということを知りたることができたのは、ひとえに監獄のおかげである。」 99P・・・
監獄コミュニケーションのはなし、共産主義化、日本における「獄中者組合」

(マリア・スピリドノワ)「わたしは全同志に対して、全人類に対して、そして全世界に対して、並はずれた異常なほどの愛情をおぼえたのだ。あらゆる色調と明暗とが私たちのそれに比較して強烈すぎるような、別の世界に移住したような気がしていた。それらの日々ほど人生を愛したことはなかった。」 117P

(サゾーフ)「壁と拘禁状態、恐ろしく粗末な食事、それに外では自分を思い焦がれているいとしい人がそれぞれいるという事にもかかわらず、一人ひとりが精神の強靭さと弾力性とを身につけているので、そのことを考えると、人は未来に賭ける自己の信念が新たに湧き上がり強められるのを感じるのだ。すべての同志が自分と同じように耐えているのだと思うと、自分だけの苦しみは解消してしまう。自分が巨大な全体の一部であると感じること、つまり自分自身の所有物は一切持たず、パンと金とかの物質的な私有物のみでなく、自分がひとりぼっちだという感覚も捨て去り、悦びも悲しみも共有財産であるような状態になることが、どれほど素晴らしいことであるかわかりさえすればいいのだ。もし僕の言わんとするところが本当に理解できれば、僕たちがこんなにいつも澁刺として若々しく、外の世界の自由の身の人間にとっては、いわゆる個人的苦痛と呼ばれることがらに対してあまり神経を使わないでいられる秘密を、発見するだろう。」 123P・・・
精神の純化・運動の中での共産主義化

(クラブチェロスキー)「この爆弾には、ダイナマイトではなく人民の涙と苦痛とがこめられている」 130P・・・
民衆の涙と苦痛の表現としてのテロ

「ボルシェヴィキの宣伝にみられる、生硬な唯物主義、排他的プロレタリア主義、および煽動的形式は、革命の新たな段階に、伝統的な社会革命党（「エス・エル」のルビ）の高い道徳的資質と汚れなき手を維持しよう、と望む社会革命党（「エス・エル」のルビ）員たちの反発を引き起こしていた。」 176P・・・
プチブル・インテリゲンチヤの立場からの反発？
ただ、これには、*反差別論の立場からのとらえ返し*もできます。例えば、レーニンのスターリンへの「粗野な」という批判の中には、スターリンが労働者階級出身ということでのレーニンのプチブル的な立場での批判とも受けとられかねないのですが、もうひとつ別の視角から、*反差別が時には、「差別されるのはいやだ、差別する側になりたい」という意味での、反差別が定立していないという意味も込められているのかもしれない、ということと類比的な意味もあるのかも知れないと、思えるのです。*

「われわれの党の初期の時代を、われわれの戦闘団のことを、思い出そうではないか、サゾーフやキャリアエフのことを思い起こそう。彼らが何という理想主義者であったことかを、また彼らがどんなに歓喜して断頭台に消えていったかを……。」 182P・・・
まさにプチブル的理想主義

「ボルシェヴィキのすべては、憎悪と遺恨な立脚している。エゴイズムに根ざしたこれらの感情は、だがしかし、組織化された労働が必要とされ、新たな生活が愛情と愛他主義の

上に建設されなければならない闘争の第二段階においては、ボルシェヴィキ自らの破産として暴露されるであろう。」183P・・・ルサンチマンのない社会変革運動はない。エス・エルの運動はレジスタンス的に収束していて、党名の「革命」ということはブルジョア的民主革命にしかならないのでは？　そもそもエス・エルの依拠してた農民大衆の一揆的運動はまさにルサンチマン的運動になっていたのではないのでしょうか？

「革命がその絶頂にあり、誰もが《憎悪》、《成功》、《権力》などという言葉を使っている間中、スピリドノワは《愛》という言葉を用いていた。」184P・・・「愛」ということの持つ抑圧性もとらえ返しておくこと。

(マリア・スピリドノワ)「ロシア共和国における独裁制は、国民の圧倒的多数による独裁制であるが、革命の敵に対して抑圧的手段をとることを回避するものではない。しかしながら、テロ体制をとる必要はいささかも存在しないし、かつまた、党はこれを革命的民主主義の統治を危うくする方法であるとして拒否するものである。」184P

「あらゆるロシアの社会主義者たちは、ツァーリとの抗争の中で国家を嫌悪し、蔑視することを教えられていった。唯、ボルシェヴィキのみが、国家の戦略と奸計、その外交手腕や権力、それに国家が持つ非情さ、を学んだのである。唯、ボルシェヴィキだけが、政府を支える諸装置の秘密を適格に見ぬき、今度はそれらを自分たちの用途に利用するにいたったのだ。」219-20P・・・マルクスの「出来合いの機関を使うことは出来ない」というテーゼの踏み外し。そもそも武装蜂起→国家権力の奪取→プロレタリア独裁という方針自体の今日的検証。マルクスの国家=共同幻想体論のレーニンの欠落。

(マリア・スピリドノワ)「ロシア革命の歴史においては、テロリズムという言葉は単に復讐や脅迫（それは、テロリズムの精神における絶対的なものではありませんが）を意味していたのではありませんだした。否、むしろテロリズムの第一の目的は、専制政治に対する抵抗であり、抑圧された人びとの魂の中に価値意識をめざめさせることであり、忍従状態の中で沈黙を守っている人びとの自覚を喚起することでした。その上、テロリストの行動はほとんど常に、自己の自由や生命の自発的犠牲を伴っていたのです。このような場合のみ、革命家のテロ行為は正当化される、と私には思われます。」232-3P

訳者あとがき

「この党としての左翼エス・エルは、ボルシェヴィキ型の上下、左右に厳密に統御された前衛組織というよりも美しい魂をもった個々の革命家の集団であったという方が適切であろう。その党は、何よりも現在を大切にした。今、民衆は何に苦しみ、何を求めているのか？　今、誰が涙を流して、叫んでいるのか？　こうして彼らは自己を、一つのいわば《民衆の感覚器官》とでもいうべきものへと形成していった。誰よりも敏感に民衆の苦しみを感じとり、誰よりも深く民衆の怒りを憤り、そして誰よりも素早く民衆の復讐を遂行したのである。」317P・・・単なる復讐ではなく、防禦としてのテロ　「今」？　革命とは未来に賭けること、「今だけ、ここだけ、自分だけ」の批判

「チェカに追われ、反革命の烙印を押された、左翼エス・エルが、再び爆弾を手にした時、その爆弾に「人民の涙と苦痛がこめられ」ていなかったなどと断言するならば、私たちは《革命の貌》に永久に触れえないであろう。」317-8P・・・非暴力主義批判の反暴力主義

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 073

・早川千絵監督「PLAN75」2022

この映画はSNSで話題になっていた倍賞千恵子さんが主演して賞もとった映画です。

コロナ禍で劇場で見逃したので、ビデオオンデマンドでやっと観れました。いわゆる「積極的安楽死」を政策として導入した「未来社会」を描いた映画です。75歳になったら死を選択できるという、昔からあった「姥捨て山」とかにつながる話です。

いわゆる社会派といわれる早川千絵監督の作品。つましく、状況に流されて生きていくと、ちょっとしたところの積み重ねの中で、こういうところに行きついていく、ということを感じていました。

冒頭に「未来社会」を描いたと書きましたが、現実には透析からの離脱という選択肢を示すとかで事件が起きています。そもそも2000年代の後半には、病院や福祉施設を利用するときに、「何か医療的処置が必要になったとき、延命処置をしますか」ということで選択の書類の提出を求められるようになっていました。以後、「ACP」とか「人生計画」とか、手を替え品を替えの様々な形での、選択の押し付けがなされてきたのです。それは「持続可能な福祉制度」（「障害者自立支援法」制定の際の議員立法提出者の主旨説明の発言）ということの中での、医療費の削減ということで、自己決定という幻想の下での、「死へ誘う医療」ということが始まっていたのです。

この映画は、機械の不具合か何かで、生き残った倍賞千恵子が演じたメインの主人公が、これからどうしようというところで終わっているのですが、乗り損ねた福祉制度にきちんと乗るといふぼんやりした方向性が出ています。そもそも、その「未来社会」も福祉制度をきちんと働かせないというところで、多くの乗り損ねを意図的に生み出している社会なのですが、それは、実は解決していく方向性として、基本生活保障ということで出せるのです。実は、竹中平蔵新自由主義者の権化がベーシックインカム（基本所得保障）を出していることでごちゃごちゃになっているのですが、竹中平蔵ベーシックインカムはそもそもベーシックインカムの基本的概念を押さえない、福祉の切り捨てのための自己責任論としてのまやかしのベーシックインカム論なのです。日本における「ファシズムの芽」的な存在の日本維新の会の一部論者がそのことに乗っているのも、その論理のおそろしさを示しています。ベーシックインカムの一律給付ということでは、介助を必要とする「障害者」は生きられなくなります。「障害者」だけではありません。様々な生活条件で、必要とする保障は変わってきます。だから、これは基本生活保障という概念に替えることです。そもそもベーシックインカム自体が資本主義では実現不可能で、意味があるとしたらネグリ／ハートが『<帝国>』で突き出した構造改革革命論としてのベーシックインカム論なのです。

わたしは、そもそも今の社会の仕組み自体を問い直すこととして、この映画を観ていました。

(編集後記)

◆やっとな前のペースの態勢に戻ってきつつあります。学習と文書書きもスムーズに進んでいます。ただ、運動的などころでの動くことがかなり増えそうです。そうなるとう学習と宿題が滞るかもしれません。ただ、わたしの理論は運動のための理論で、運動的な働きかけ合いの中でこそ、わたしの理論的構築が進んで行くことも経験しているので、むしろ何か新しいことが生まれることがあるかも知れないのですが、ほどよくバランスをとるといふことは、わたしには無理なようで、どうなっていくのか、・・・。

◆巻頭言は、ファシズム論再々論、丁度読書メモで『世界の共同主観的存在構造』を読んでいて、そこからファシズム論の不備を深化してとらえ返したところでの論攷です。

◆読書メモで連載を始めた『世界の共同主観的存在構造』は今回はお休みです。マルクスを押しえた障害問題の本が一冊でした。かなり共鳴することがあり、急ぎ読んでメモを残しました。そこから派生して、その本の中で紹介していた本1冊『左翼、エス・エル戦闘史』も読了、読書メモも書きました。更に同じ本で紹介されていたもう文庫本で六冊(1部上下で3部)、ベルリン転換期三部作の本も、これはドイツ革命の敗北からナチの権力掌握から、敗戦によるファシズムの終焉——それは同時にスターリニズムへの飲み込まれ——までを描いています。これももう読書メモ書き終えているのですが、次回に繰り延べしました。巻頭言の(註2)で少しふれました。

◆宿題の本格的取り組みに入りたいのですが、この間のもやもやしたものをひきずっていて、こちらの再開や新しい取り組みに踏み込めないでいます。

◆スペースが空いたので、次回の巻頭言で準備していることをちょっと導入的なこととして書いておきます。

コロナが始まったころから、ニュースのハシゴをするようになっていました。コロナがどういふことか分からないから情報を集めようとしていたのですが、そういう中で、コロナだけでなく、広く情報収集をするようになり、右派のひとたちがどういふ論理をしているのかも情報収集の対象にするようになりました。BSフジの「プライムニュース」です。尤も、橋下徹元大阪府知事・元大阪市長や櫻井よしこコメンテーターが出ていて、もうチャンネルを変えてしまうのです。その顔を見るだけで気分が悪くなるのです。このひとたちの話は論理でなくて感情です。一方的にひとの話をして、自分の非論理的な考えを相手に押し付けようとしているだけで、非論理性の例証になるような話なのです。ただ、相手が即応出来ない場合、視聴者に共感する人が出てくるという話です。尤も、この番組の視聴者は批判のために見ている以外のひとは右派イデオロギーに共鳴しているひとたちで、メールで質問など受けつけているのですが、取り上げるのは殆ど右派のひとたちの意見や質問で、この番組自体が、ファシスト養成講座の役割をはたしているのではないかと思える程なのです。

その番組の中で、自民党の国会議員が、とんでもない発言をしています。いろいろあるのですが、ひとつだけここで書いておきます。日本の侵略戦争や植民地支配での被害を受けた徴用工問題や「従軍慰安婦」問題での謝罪の話です。最初は「自民党内で「いつまで謝罪すればいいんだ」といふ話がでています」といふ話をしていたところ、そのうち自分の意見として言い出しました。わたしたちは、学校教育の中で、ひととひとの関係といふ

ことを学びます。そもそも学校教育がおかしくなっているのですが、それでも、そんなことをわたしは学びました。その中で、謝罪ということも学びました。「いつまで謝罪すればいいんだ」という発言は、これまでの謝罪をリセットする発言なのです。そんなことも分からないひとが政治家をやっているのでしょうか？

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのことともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>